

一

次の――線部の読みをひらがなで書きなさい。

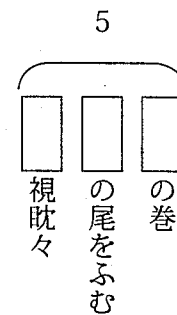
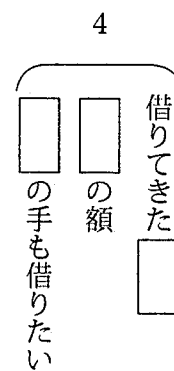
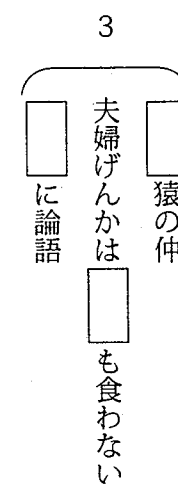
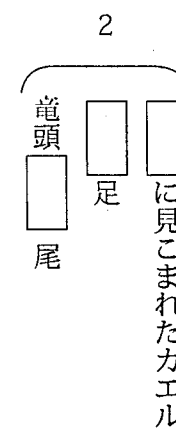
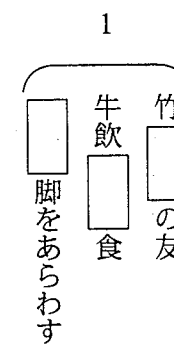
- 1 幼いときの夢を育む。
- 2 冬は素足では寒い。
- 3 王様が君臨する。
- 4 貸し借りを相殺する。
- 5 非業の最期をとげる。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 音楽を聞くと気持ちがナゴむ。
- 2 校舎の移転をスイシンする。
- 3 ユダン大敵。
- 4 身のケツパクを証明する。
- 5 ユウシユウの美を飾る。

次の1から5の  には、それぞれ共通の動物の名前が入ります。その動物の呼び名を以下の語群から選び、記号で答えなさい。  
ただし、語群の中に適当なものがない場合は、解答欄に×を記しなさい。



【語群】

|   |    |   |     |   |    |   |    |   |    |   |   |
|---|----|---|-----|---|----|---|----|---|----|---|---|
| ア | ね  | イ | うし  | ウ | とら | エ | う  | オ | たつ | カ | み |
| キ | うま | ク | ひつじ | ケ | さる | コ | とり | サ | いぬ | シ | い |

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

日本語の論理が風化した線のようなものであるのは、俳句にひじょうによくあらわれています。和歌と俳句を比べますといちばんの違いは、和歌は流れが少し線的なところがあります。それに対して、俳句のほうは切れている。そこがまあ俳句らしさというものの一つの根拠になると思います。

和歌がいわば線的だといっていますが、それはふつうの散文に比べますと、かなり点的な、A 切れておりまして、そこに余韻とかそういうものが出てくるのです。

ふつうの日本語の散文というものは、和歌、俳句に比べますと、はるかにつながりが大きいのですけれど、ヨーロッパの言葉に比べると、これでもなおかつ、① 相当に切れているところが大きい。

こういう言葉で育ってきた日本人が、外国語を読むと、何かこう七面倒臭く、うるさく、くどくと言っているという感じになるわけです。小説にしましても、詩にしましても、ふつうの散文にしましても、そういうことがいえます。

これは、日本語が母国語であるのに外国語だから、抵抗があることと少しは関係があるかもしれない、とはじめは思ったのですが、母国語であるということを除きましても、日本語はどうもサラリとしている、しゃれている。英語のほうは、バカ正直に、なんでも全部いつてしまわないと気がすまないというところがあります。

言語というものは、どこの言語でもだいたい、ある程度は、いわない部分があるわけです。全部いうことはできないわけですから……。その限りにおいて、どこの国の言葉でも点的だということはできると思うのです。ただ、その点の離れ方が大きいとか小さいかということに、それぞれ一つの言葉の特色が出てきているのではないのでしょうか。

日本に、俳句という文芸様式ができたというのも、点の離れ方がかなり大きくても、それを繋げるだけの理解をする力、おたがいが点を線にしていく力があるからです。あまり点をくつつける必要がなくて、大きく離れた表現でも、じゅうぶん繋がりを理解

しうる人でないと俳句はわからない。散文に比べると、韻文はだいたい、② 点の広がりが大きい。これはどこの国の言葉もそうだと思います。

日本語では点の広がりが、かなり大きくないと、言葉のおもしろさ、美しさ、なだらかさなどが伝わるというところがないのです。あんまりつづめますと、厳密ではあるかもしれないが、③ やぼったくなります。そのへんに、日本人が長年もち続けてきた言語感覚というものの一つの特性があるわけですから、ヨーロッパの言語であらわされるような論理を出すすれば、やはり「言葉の感覚」を多少変えていかなければいけないでしょう。

ところが、感覚を変えないで「理論的な」言葉だけを使おうとします。感覚と切り離して言葉を使おうという風潮が強くなりすね。ことに、戦後は、外国語にひじょうに関心を持って実際に外国語ができるかできないかということとは別に、外国語というものに多くの人は眼を向けています。それでお留守になったのは母国語です。④

母国語が、感覚から離れたところで使われているために、⑤ 自然にわからなくてはならない問題までわかっていないのではないかと……。そういうふうに思うのです。

その一つが、「点的の論理」というもので、これを頭におきますと、⑥ 日本語にも相当しつかりした論理があるということがわかると思います。それは、ヨーロッパの論理とは性格が違いかもしれませんが、これをけつして、恥じたりする必要はないと思います。その点でこれまで日本人がいてきた、日本語は論理的でないという引け目はいわれののないものとして捨てたほうがいいと思います。

(中略)

「日本語を非論理的だ」という人は、日本語では論理を表現することができないようにとっていますけれど、逆に、ヨーロッパの言語では、日本語の中の論理、B、俳句とか禅問答のような論理はどうもうまくとらえられない。

ヨーロッパの言語でも、論理で全部おっているわけではありませんし、日本語の中にある論理は、ヨーロッパの言語の手うす

なところに強いかわりに、ヨーロッパの得意とするところは手うすであるということです。ヨーロッパの文化を日本へ持つてこようと努力したときに、日本語が非論理的だという印象があつたのは、これは実感として認めなければならない。

〔C〕、それを日本語一般に押し広げて、「日本語は非論理的だ」というのは、言語というものの理解の根本に触れる大きな誤り、考え違いがあるのではないかと思います。欧米先進文化に対する在来の文化の劣等感みたいなもの、「日本のものはみな古くてだめだ」という思想で、それが明治から大正、昭和と続きました。戦後また、戦争に敗れ、あらためて、日本はまだ古くてだめなんだ、やはり合理的にしなくてはいけない、論理的なもの、を考えなくてはいけないということで、もう一回、在来的、伝統的なものを否定する思想が強まりました。

それに対する反動として、日本のものに関心をもとうという傾向が出てきた、これは必然的なものだと思います。しかし、これが度をすぎますと、日本のものはいいい、外国のものはだめなんだ、という排外思想に結びつく危険もあります。こういうことはとかく、極端から極端へ移る傾向があります。

言葉の問題に関しても、日本語が不当におわされていた非難は取り除く必要がありますけれども、取り除く過程で、世界で日本語ほどいい言語はないのだ、というふうな、いわゆる国粹主義的な国語愛護精神は、慎まないといいけません。<sup>⑦</sup>

(外山滋比古「文化と言語教育 初めに言葉ありき」より)

問一

A

B

C

にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい(ただし、同じ記号を二度以上選んではいけません)。

ア あたかも    イ つまり    ウ しかし    エ たとえば    オ さて

問二 — 線部①「相当に切れているところが大きい」とありますが、「切れている」ことによって伝わるものとは何ですか。文

章中から十五字以上二十字以内で探し、書き抜きなさい(句読点も一字と数える)。

問三 — 線部②「点の広がり」によって何をもちがいますか。文章の中から漢字二字で書き抜きなさい。

問四 — 線部③「やぼったく」とありますが、本文中で「やぼった」いとはどのような意味を表していますか。文章中から二十五字で探し、最初の五字を書き抜きなさい(句読点も一字と数える)。

問五 — 線部④「留守」と同じ意味で使われているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 黙って留守を使う。

イ お留守を預かる。

ウ 手がお留守になる。

エ 留守見舞いをする。

オ 忙しく留守がちになる。

問六 ——線部⑤「自然にわからなくてはならない問題までわかっていない」といえるのはなぜですか。最も適当と思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉の論理性を優先しすぎたあまり、行間を読む力が衰えてしまったため。
- イ 日本人が長年持ち続けてきた言語感覚を変えずに、英語を使用しているため。
- ウ ヨーロッパの言語論理の中で育ち、日本独特の文化を理解する機会に恵まれなかったため。
- エ 外国語の習得に力を注ぐあまり日本語の勉強をしなくなり、言語感覚が衰えたため。
- オ 若い世代が増え、昔ながらの俳句の良さを理解できる人が少なくなってきたため。

問七 ——線部⑥「日本語にも相当しつかりした論理がある」とありますが、「日本語の論理」を比喻を用いて説明している部分を文章中から探し、十一字で書き抜きなさい（句読点も一字と数える）。

問八 ——線部⑦「国粹主義的な国語愛護精神は、慎まないといけません」とありますが、それはなぜですか。次の

【理由文】

(十一字)

があるから。

問九 本文の内容と合っているものを次の中から選び、記号で答えなさい（答えは一つとは限らない）。

- ア 日本人は欧米先進文化に対し劣等感を抱き、俳句や和歌などに代表される伝統的な文芸の中に存在していた日本語の論理を確立した。
- イ 「日本語は古くてだめだ」という思想から、「世界で日本語ほどいい言語はない」という思想にがらりと変わるのは危険である。
- ウ 和歌が線的だとすれば散文は点的な文芸様式であり、どちらも切れているところが大きく、日本人の言語感覚に影響を与えた。
- エ 日本人には、「ヨーロッパの言語の論理と比べると日本語は相対的に非論理的だ」ということを受け入れる寛容な姿勢が求められる。

オ 日本語が論理的であることを認め、母国語への不当な非難を取り除き、日本語こそが唯一の感覚的言語であることを訴えるべきだ。

カ 日本語と外国語では得意とする論理が異なるため、とらえる対象が根ざしている論理に合わせて「言葉の感覚」を変える必要がある。

問十 ——線部「日本語が不当におわされていた非難」とありますが、それはどのようなことですか。「感覚」「論理」という語を必ず用いて、五十以上六十文字以内で説明しなさい（句読点・記号も一字とする）。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

勝負事ということが、話題になった時に、私の友達の一人が、次のような話をしました。

「私は子供の時から、勝負事というところ、どんな些細なことでも、厳しく戒められて来ました。幼年時代には、誰でも一度は、弄ぶにきまつている、めんこ、ねつき、ばいなどというものにも、ついぞ手を触れることを許されませんでした。『勝負事は、身を滅ぼす基じゃから、真似でもしてはならんぞ』と、父はへ 1 〳〵幾度も幾度も繰り返して私を戒めました。そうした父の懸命な訓戒が、いつの間にか、私の心のうちに勝負事に対する憎悪の情を、培っていったのでしよう。小学校時代などには、友達がめんこを始めると、そつとその場から逃げ帰って来たほど、殊勝な心持でいたものです。」

私の父が、いろいろな憎悪の中から、勝負事だけを、なにゆえこんなに取り分けて戒めたかということは、私が十三、四になつてから、やつと分つたことなのです。

私の家というのは、私が物心を覚えて以来、ずっと貧乏で、一町ばかりの田畑を小作して得るわずかな収入で、親子四人が（A）暮らしていたのです。

確か私が高等小学の一年の時だつたでしょう。学校から、初めて二泊宿りの修学旅行に行くことになったのです。小学校時代に、修学旅行という言葉が、どんなに魅惑的な意味を持っているかは、たいていの人が、一度は経験して知っておられることと思いますが、私もその話を先生から聞くと、小躍しながら家へ帰って来ました。帰って両親に話してみますと、どうしても、行つてもいいとはいわれないのです。

今から考えると、五円という旅費は、私の家にとっては、かなりの負担だつたのでしよう。おそらく一月の一家の費用の半分にも相当した大金だつたろうと思います。が、私はそんなことは、考えませんから、手を替え品を替え、父と母とに嘆願してみたのです。が、少しもききめがないのです。

もう、（B）明日が発だという晩のことですが、私は学校の先生には、多分行かれない、と返事はして来たものの、行きたいと思う心は、矢も楯も堪らないのです。どうかして、やつてもらいたいと思ひながら、執念く父と母とに、せびり立てました。とうとう、父も母もしつこい私を、持てあましたのでしよう、泣いたり、怒ったりしている私を、捨てておいて二人とも寝てしまいました。

私は、修学旅行の仲間入りのできないことを、友達にも顔向けのできないほど、恥かしいことだと思ひ詰めていたのですから、一晩中でも泣き明かすような決心で、父の枕元で、いつまでも（C）駄々をこねていました。

父も母も頭から、蒲団を被っていましたものの、私の声が彼らの胸に（D）と応えていたことはもちろんです。私が、一時間近くも、旅行にやつてくれない恨みを、くどくどといひ続けた時でしよう。今まで寝入つたように黙っていた父が、急にむつくりと、床の中で起き直ると、蒲団の中から顔を出して、私の方をじつと見ました。

私は、あんまりいい過ぎたので、父の方があべこべに怒鳴り始めるのではないかと、内心（E）ものでいましたが、父の顔は怒っているというよりも、むしろ悲しんでいるといったような顔付でありました。涙さえ浮んでいるのではないかと思うような目付をしていました。

『やつてやりたいのは山々じゃ。わしも、お前に人並のことは、させてやりたいのは山々じゃ。が、貧乏でどうにもしようがないんじゃ。わしを恨むなよ。恨むのなら、お前のお祖父さんを恨むがええ。御殿では一番の石持といわれた家が、こんなになつてしまったのも、皆お祖父さんがしたのじゃ。お前のお祖父さんが勝負事で一文なしになつてしまつたんじゃ』と、いうと、父はへ 2 〳〵クルリ向うを向いて、蒲団を頭から被つてしまいました。

私は、自分の家が御維新前までは、長く庄屋を勤めた旧家であつたことは、誰からとなく、薄々きき知っていたのですが、その財産が、祖父によつて、蕩尽されたということは、この時初めて、父からきいたのです。むろんその時は、父の話を聞くと、二の句が次げないで、泣寝入りになつてしまつたのです。

その後、私は成長するに従って、祖父の話を父と母からきかされました。祖父は、元来私の家へ他から養子に來た人なのですが、三十前後までは真面目<sup>まじめ</sup>一方であつた人が、ふとしたことから、賭博<sup>ばくち</sup>の味をおぼえると、すっかりそれに溺<sup>おぼ</sup>れてしまつて、何もかもうつちやつて、家を外にそれに浸<sup>ひた</sup>りきつてしまつたのです。御厩<sup>ごう</sup>の長五郎という賭博の親分の家に、夜昼なしに入り浸っている上に、いい賭場<sup>とば</sup>が、開いているというのと、五里十里もの遠方まで出かけて行くという有様で、賭場に身も心も、打ち込んでいったのです。天性の賭博好きというのでしょうか。勝つても負けても、にこにこ笑いながら、勝負を争っていたそうです。<sup>③</sup>それに豪家<sup>ごうか</sup>の人だということで、どこの賭場でも『旦那旦那』と上席に座<sup>すわ</sup>らされたそうですから、つい面白くつて、家も田畑も、壺皿<sup>つぼざら</sup>の中へ叩<sup>たた</sup>き捨ててしまつたのでしょうか。むろん時々勝つたこともあるのですが、根が素人<sup>しやうと</sup>ですから、長い間には負け込んで、田畑を一町売り二町売り、とうとう千石<sup>せんごく</sup>に近かつた田地を、みんな無くしてしまつたそうです。おしまいには、賭博の資本にもことを欠いて、祖母の櫛<sup>くし</sup>や笄<sup>くわがひ</sup>まで持ち出すようになったそうです。しまいには、住んでいる祖先伝來の家屋敷<sup>いையしき</sup>まで、人手に渡すようになってしまつたのです。

が、祖父のこうした狂態<sup>きやうたい</sup>や、<sup>④</sup>それに関した逸話<sup>いつわ</sup>などはたくさんききましたが、たいいてい忘れてしまいました。私が、今もなお忘れられないのは、祖父の晩年についての話です。

祖父が、本当に目が覚めて、ふつとりと賭博を止めたのは、六十を越してからだということです。それまでは、財産を一文なしにしてしまつた後までも、まだ道楽が止められないで、それかといつて大きな賭場には立ち回られないので、馬方や土方を相手の、小賭場まで、打つようになっていたそうです。それを、祖母やその頃<sup>ころ</sup>二十五、六にもなつていた私の父が、涙を流して諫<sup>いさ</sup>めても、どうしても止めなかつたそうです。

が、祖父の道楽で、長年苦しめられた祖母が、死ぬ間際になつて、手を合せながら、『お前さんの代で、長い間続いていた勝島の家が、一文なしの水呑百姓<sup>みずのみひやくしやう</sup>になつてしまつたのも、わしや運<sup>あきま</sup>だと諦<sup>あきら</sup>めて、厭<sup>いと</sup>いはせんが、せめて死際に、お前さんから、賭博は一切打たんという誓言<sup>せいげん</sup>をきいて死にたい。わしは、お前さんの道楽で長い間、苦しめられた

のだから、後に残る宗太郎やおみね（私の父と母）だけには、この苦勞はさせたくない。わしの臨終の望みじゃほどに、きつぱり思い切つて下され』と、何度も何度も繰り返して、口説<sup>くど</sup>いたのがよほど効いたのでしょう、義理のある養家を、根こそぎ潰<sup>つぶ</sup>してしまつた我悔<sup>がかい</sup>が、やつと心のうちに目ざめたのでしょうか。また年が年だけに考えもしたのでしよう、それ以来は、<sup>3</sup> 〳、賭博を打たなくなつてしまつたのです。

それで、六十を越しながら、息子<sup>ひすこ</sup>を相手に、今では他人の手に渡つてしまつた昔<sup>むかし</sup>の自分の土地で、小作人として、馴<sup>な</sup>れない百姓仕事を始めたのです。が、今まで、ずいぶん身を持ち崩<sup>くずれ</sup>していたものですから、そうした荒仕事<sup>あらしじこ</sup>には堪<sup>た</sup>えなかつたと見え、二年ばかり経<sup>た</sup>つと、風邪<sup>かぜ</sup>か何かが因<sup>もと</sup>で、<sup>4</sup> 〵、亡くなつてしまつたのです。

一生<sup>いしやうがいの</sup>涯、それに溺<sup>おぼ</sup>れてしまつて、身にも魂<sup>たましい</sup>にもしみ込んだ道楽を、封<sup>ふう</sup>ぜられたためでしょうか、祖父は賭博を止めてからというもの、何となくほうけてしまつて、物忘れが多く、畑を打ちながら、鋤<sup>う</sup>を打つ手を休めて、ぼんやり考え込むことが多かつたそうです。そんな時は、若い時に打つた五百両千両という大賭博の時に、うまく起きてくれた賽<sup>さい</sup>ころの目のことでも、思い出していたのでしょうか。

それでも、改心をしてからは、さすがに二度とふたたび、勝負事はしなかつたのです。もし、したことがあつたならば、それはただ一度、次にお話しするような時だけだろうとのことなのです。

▼それは、何でも祖父が死ぬ三月ぐらい前のことです。秋の小春<sup>こはる</sup>日和<sup>びより</sup>の午後に、私の母が働いている祖父に、おやつ<sup>おやつ</sup>の茶を持つて行つたことがあるのです。見ると、稲<sup>いね</sup>を刈<sup>か</sup>つた後の田を、鋤<sup>す</sup>き返しているはずの祖父の姿が見えないのです。多分田の向うの藁<sup>わら</sup>堆<sup>たい</sup>の陰<sup>かげ</sup>で日向ぼっこをしているのだらうと思つて、その方へ行つてみますと、果して祖父の声が聞こえて來るのです。

『今度は、俺<sup>おれ</sup>が勝ちだ』と、いいながら祖父は声高く笑つたそうです。その声を聞くと私の母は、はつと胸を打たれたそうです。きつと、古い賭博打ちの仲間が來て、祖父を唆<sup>そそ</sup>かして何かの勝負をしているに違<sup>ちが</sup>ひない、と思つと、手も足も付けられなかつた祖父の、昔の生活が頭の中に浮んで來て、ぞつと身が震<sup>ふる</sup>うほど、情<sup>なさけ</sup>なく思つたそうです。せつかく慎<sup>つつし</sup>んでいてくれたのにと思つと、いったい父

を誘った相手は、どこのだいつだろうと、そつと足音を忍ばせて近づいてみたそうです。

見ると、ぽかぽかと日の当たっている藁堆の陰で、祖父とその五つになる孫とが、相対して蹲うすくまっていたそうです。何をしているのかと思ってじつと見てみると、祖父が積み重かさなっている藁の中から、一本の藁を抜いたそうです。すると、孫が同じように、一本の藁を抜き出したそうです。二人はその長さを比べました。祖父が抜いたほうが一寸ばかり長かったそうです。

『今度も、わしが勝ちじゃぞ、はははは』と、祖父は前よりも、高々と笑ったそうです。

それを見ていた母は、祖父の道楽のために受けたいろいろの苦痛に対する恨みを忘れて、心からこの時の祖父をいとおしく思ったとのことです。▲

④ 祖父が最後の勝負事の相手をしていた孫が、私であることは申すまでもありません

(菊池寛「勝負事」より)

問一 〈1〉〜〈4〉にあてはまる言葉をそれぞれ次より選び、記号で答えなさい。

ア 生れ変かわったように

イ 口癖くぐせのように

ウ ぽつきり枯枝かれえだが折れるように

エ すべての弁解べんかいをしてしまったように

問二 (A) (E) にあてはまる言葉をそれぞれ次より選び、記号で答えなさい。

ア ぐずぐず イ いよいよ ウ かつかつ エ びくびく オ ひしひし

問三 ——線部(1)「殊勝」の意味として適当でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア けなげなようす。

イ 誇らしげなようす。

ウ 特にすぐれているようす。

エ 神妙なようす。

オ 心がけがよくて感心なようす。

問四 ——線部(2)「そんなこと」とは、どんなことですか。次より最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 修学旅行には行けないということ。

イ 両親にとつてききめのある言葉。

ウ どんな言葉もききめがないということ。

エ 両親が行ってもいいといわない理由。

オ 旅費を出すことがかなりの負担になること。

問五 ——線部(3)「財産が、祖父によって、蕩尽された」について、賭博によって「財産が」「蕩尽された」ことを別の言葉で表している部分をこれより後の本文から二十字で書き抜きなさい(読点も一字と数える)。



問六 ……線部①④の「それ」の内、一つだけ用法の異なるものがある。それはどれか、番号で答えなさい。

問七 —線部①⑤で、別の人物を指す呼称が一つだけ混ざっている。それはどれか、番号で答えなさい。

問八 ▼～▲までの範囲について左の問いに答えなさい。

(1) ここから始まる話は「祖父」のどのような性格を表現するために描かれていると思われますか。本文全体より七字で書き抜きなさい(答えは必ずしも▼～▲の範囲とは限りません)。

(2) この間の「母」の心情の移り変わりを示したものとして、最も適当と思われるものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 不信心↓感銘↓残念な気持ち ↓怒り↓啞然↓いぶかしい気持ち  
 イ 不安感↓恐怖↓冷酷な気持ち ↓憤り↓慄然↓いつくしむ気持ち  
 ウ 不審感↓驚き↓みじめな気持ち↓憤り↓呆然↓いじらしい気持ち  
 エ 不信心↓恐怖↓みじめな気持ち↓憤り↓啞然↓いじらしい気持ち  
 オ 不安感↓驚き↓残念な気持ち ↓怒り↓呆然↓いぶかしい気持ち  
 カ 不審感↓感銘↓冷酷な気持ち ↓怒り↓慄然↓いつくしむ気持ち

問九 祖父が賭博を止めた理由として、適当と考えられるものを次より選び、記号で答えなさい(ただし、答えは一つとは限らない)。

ア 祖母(妻)に死ぬ間際に賭博をやめて欲しいと説得されたことに深く感じ入ったから。  
 イ 祖父(夫)の道楽のために自分だけがさんざん苦しめられてきたと、祖母(妻)がしつこくなってきたから。  
 ウ 若い頃に身も心も賭博に打ち込みすぎて六十を越すと全く氣力を失ってしまったから。  
 エ 祖母(妻)の持ち物を売ったり、我が子を修学旅行に行かせられなかったことがつらかったから。  
 オ 賭博によって養家の財産を使い果たしてしまったことを後悔するようになったから。  
 カ 今までに失った財産を賭博によって取り返すことはできないと悟ったから。

問十 祖父はおよそ何年間、賭博を続けたものと思われますか。次より最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 十年    イ 十五年    ウ 二十年    エ 二十五年    オ 三十年



があるから。



|    |  |
|----|--|
| 問三 |  |
| 問四 |  |
| 問五 |  |

問八 (1)

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

(2)

|  |
|--|
|  |
|--|

問九

問十